小説 斐芝嘉和
挿絵 壱樹ともえ

立ち読み版

プロローグ 006
第一章 少女探偵の気怠い朝 018
第二章 潜入作戦 030
第三章 罠 053
第四章 爛れた館 091
第五章 響き合う身体 128
第六章 密室の情事 166
第七章 堕落 200

登場人物紹介

Characters

クリス・クロムウェル

新東京都に事務所を構える少女探偵。頭の回転は早いが、高いプライドと曲がったことが大ッ嫌いな性格が災いして、たまに暴走する。

諏訪(すわ) 讃岐(さぬき)

クリスの助手。自称二十八歳。冷静沈着で感情の起伏が少ない。射撃や格闘に精通している、経歴不明の戦闘メイド。

マクシミール

クリスの従兄弟にあたる、世界的に有名な青年実業家。

西園寺(さいおんじ) 祐三(ゆうぞう)

新東京都知事。黒い噂が絶えない人物。

第三章　罠

「三日後のパーティまでに、ペニスを見ただけで涎を垂らす牝犬にしてやる」
金髪青年は乳房から手を離し、真正面に戻った。代わりにガマガエル男が、長い舌を閃かせながら讃岐の背後に回り込む。
「なにもできない女性にふたりがかりですか？　情けない方たち……あっ⁉」
背中のジッパーが引き下ろされた。背筋をソッと撫で上げる冷たい空気に、メイドの耳が先端まで真っ赤になる。うっすらと骨の形を浮かした柔肌は、彼女の性感帯。感じてはいけないのに、肌が粟立ってしまう。
「ゲヘヘ、綺麗な肌じゃないか」
青白い手に掻き分けられて、首のつけ根から尻のすぐ手前まで黒布が左右に開き、瑞々しく輝く柔肌が現れた。肩胛骨の辺りを水平に区切るブラジャーの紐は、肌の白さを引き立てる黒。細かなフリルで飾られた、扇情的な下着である。
「ほう、ずいぶんと色っぽいブラジャーじゃないか。ヤる気満々だな」
「ち……違うっ！」
装飾過多の薄布は、清楚で質実なメイドが己に許した唯一のオシャレだった。普段なら大人の女性のたしなみです、と胸を張って言えるのに、いまは恥ずかしい秘密を暴かれてしまったような居心地の悪さしか感じない。
「どうれ、味を確かめてやろう」

「ひっ⁉」
敏感な背筋に、生温かくヌルヌルとしたモノが貼りついてきた。ガマガエル男の長い舌だ。蛇のようにくねりつつ、白い柔肌に唾液を塗り込んでいく。
「や、やめ、なさいっ！」
舌が閃くたび、背骨に快感電流が走る。勝手に痩身が捻れ、弾けるように反り返った。恥ずかしいのに止められない。脊髄が蕩けてしまったかのように、全身に微熱がこもり、手足に意志の力が伝わらない。
「コレをすると、大抵の女は泣いて悦ぶ。お前もどうやらそのクチのようだな」
「だ、誰が……くぅうっ！」
尖った舌先に、背骨の出っ張りが数えられる。舐められた場所が点々と、熱く疼いた。柔肌に染み込んだ粘液が快楽神経を掻き立てているのだ。微風に撫でられただけでもむず痒くなり、もっとしっかり触れて欲しくなる。
（ああ、いけない……）
悶える背中がじわじわと火照ってきた。肌の裏側から、淫靡な炎にチロチロと炙られているような感覚。
「いい色に染まってきたぞ。感じている証拠だ」
ほのかに赤らみ、いやらしくぬめり光る柔肌に、西園寺が目を細めた。ゆっくりと顔を

近づけ、頬を擦りつける。
「はぅっ‼」
ガマガエル男の凸凹した表皮が、柔肌に宿った淫熱を揉み散らす。背骨にわだかまっていた疼きが背中全体に広がってしまった。鋼線を束ねたがごときしなやかな背筋が、カスタードクリームのように柔らかくなってしまう。
（なんてこと……こんな、こんなのって……！）
気味の悪い男に頬摺りされているというのに、背中はヌルヌルとした感触を悦んでしまっている。くねる腰は止められず、喉の奥からは甘い吐息が迫り上がり、奥歯を噛み締めていないとはしたない鳴き声が漏れてしまいそうだった。
「おお、なんと心地よい肌だ。傭兵上がりだというからもっと荒れていると思っていたのに、どうしてどうして。絹のように滑らかで、しかもモチモチしておるわい」
悶える讃岐の背に唇を這わせた西園寺は、鼻腔を広げて息を吸い込み、
「しかも、この香り。若い牝の芳香だ」
ゲヘゲヘと下品に笑う。屈辱感を掻き立てて精神力を磨り減らす作戦だ、と分かっていても、悔しさに心が軋み、指が白くなるほど強く拳を握ってしまう。
「く……覚えていなさい、いつか必ず……っ⁉」
脇腹を擦るぬめりに、声が途切れた。背に貼りついた西園寺が腕を服の中に挿し入れ、

身体の前へと伸ばしてきたのだ。柔肌にねちょねちょした体液を塗りつけつつ、揺れる乳房へ迫ってくる。ブラジャーの縁を指先で持ち上げ、乳肌に直接触れてきた。ぬちゃり、とした粘液の感触に、全身の肌がゾゾッと粟立つ。

「どうだ、気持ちいいだろう？」

指は動かさず、掌のぬめりを塗りつけるように乳房を撫で回すガマガエル男。染み込む粘液が快楽神経を呼び覚ますのか、軽く触れられているだけなのに肉釣鐘がじんわりと熱くなってくる。

「うぅ……気持ちよくなんて……ひっ⁉」

火照り始めた柔肌に、小さな唇のようなモノがピチュッと吸いついてきた。吸盤まであるのか。左右の胸乳に五つずつ、合計十箇所にキスの感覚を覚える。

（ああ、いけない……！）

粘液に濡れて感度を増した肌が、小さな接吻を受けてむず痒くなる。チュウチュウと吸い立てられると、そこに快感極点が生じた。柔肌の裏側から小筆の先でくすぐられているような、こらえがたいこそばゆさ。それが、少しずつ位置をずらして双球を覆い尽くしていく。そのうえ――。

（ブ、ブラが、ずれてる……）

男の指に潜り込まれたカップが、乳房の上にずり上がっていた。メイド服の裏地に肉突

起が擦れ、乳頭にチリチリとした感覚が生じる。双球が揺れると前後左右に捏ね回され、折り曲げられた根元に熱い疼きが溜まり始めた。揉み潰したいようなむず痒さが乳首の中に充満し、膨れ上がってくるのが分かる。

「大きな乳だのう。どれ、弾力はどうかな？」

吸盤で表面を弄っていた西園寺の手が、肉釣鐘の外側に貼りついて激しく蠢き始めた。

「あ、あぁっ！　やめ……やめなさいぃっ！」

肌の裏側に疼いていた淫熱が、喰い込む五本の指に撹拌され、乳肉の奥へ浸透していく。乳房を内側から揉み上げるのは、谷間に挟み込んだホルスター。左右から寄せ合わされるたび、棒状の塊が柔肉にめり込み、奥のほうまで揉み解されてしまう。

「揉み甲斐のある乳だな。柔らかな肉が詰まっておる。指が押し返されるぞ」

「うぅ……やめ、なさいって、言ってるでしょうっ！」

身を揺すり、振り払おうとしたのに、ガマガエル男はますますピッタリと貼りついてきた。敏感な背中に頬を擦りつけられると、快感の津波が手足の指先まで走り抜け、全身がカァッと煮立ってしまう。

（くぅ……あ⁉　ま、まずい……）

秘部がじわり、と熱を帯びた。蕩ける乳房に呼応して子宮が熱を帯び、粘膜ビラに恥ずかしい蜜が滲んできたのだ。肉割れに喰い込んだ股布を伝い、生温かい液体が前後に染み

広がってくる。
「美味そうな匂いがしてきたじゃないか、ええ？」
「へ、変なことを、言わないで……あ⁉」
脇腹に、ぬるぬるとしたモノが巻きついてきた。西園寺の舌が服の中へ潜り込み、柔肌に唾液を塗り込みながら、身体の前へと回ってくる。
「ああイヤっ！　やめ……ひっ⁉」
ヘソに弾けるくすぐったさ。生温かな舌先に、軽く穿られている。思わず腰が引けると、
「あ……い、いやっ！」
今度は尻に、硬い塊が押しつけられる。
「どうだ、ワシの逸物は。なかなかに大きいだろう？」
「いや、やめ……擦りつけないでっ！」
スラックスを破らんばかりに勃起した西園寺のペニスが、尻房を左右に割るように下からグリグリと押しつけられた。桃尻の谷間にはまり込み、スカートを押し上げて秘裂に迫る。布越しだというのに、雄々しく張り出したエラや木の根のように捻れた太い肉棹の形がハッキリと分かってしまう。
（く、くそぉ……！）
屈辱に歯軋りするが、腹の中心部をコチョコチョと舐めくすぐられると反射的に腰が引

け、西園寺の股間に尻を擦りつけるような格好をやめられない。逃れようとして身体を捻れば、尻房の間にはまり込んだ剛棒をしごくような形に。尻肌はペチコートの裏地に擦りまくられ、じんわりと熱を帯び始める。
「お、欲しがっておるのか？　よしよし、可愛いヤツだ」
「……！」
ガマガエル男の嘲笑が耳のすぐうしろで聞こえた。襟足に息が吹きかかる。異常な体型にモノを言わせ、舌先でヘソを弄りつつ唇で耳を責めようというのだろう。ただの若い女性であれば不気味さに悲鳴を上げていたかもしれない。だが、囚われのメイドは違う。
「い、いや！　やめてっ‼」
寄せられた唇から逃れるフリをして、頭を前に下げる。ショートカットの黒髪が左右に割れ、ほんのりと赤らんで艶めかしく輝くうなじが現れた。吹きかかる鼻息が、フイゴのように荒くなる。
「褒めておるのに、なぜ逃げる？　それそれ、可愛いお耳をしゃぶってやろう」
調子に乗った西園寺が背筋を伸ばし、逃げた耳朶を追って唇を寄せたとき。
「ハッ！」
気合いとともに、頭を勢いよく跳ね起こす讃岐。
ガツン！

男の低い鼻梁を、後頭部が叩き潰した。思わぬ反撃に目を丸くした西園寺は、顔を両手で押さえて後退り、

「な……なにをするかっ！」

自分には一切罪がないとでも言い出しそうな口調で叫ぶ。首を捻って背後を見たメイドは、切れ長の瞳に見下した冷笑を浮かべる。

「辱めれば大人しくなると思っていたのですか？　なんともまあ貧弱なおつむですこと」

「ぐぬぬ、下手に出ておればいい気になりおって……」

悪人らしく呻く知事を、それまで黙っていた青年が手を上げて止めた。

「ソイツはなにもできないのですから、口車に乗せられてはいけません。それより、例の能力者を試してみたらどうです？」

言いながら携帯を取り出し、二言三言指示を出した。

（そう、外部との連絡は可能なのね……あ⁉）

新たに得た情報から次の反撃の手を考えていたとき、いきなり情景が変わった。

いや、石組みの部屋に変わりはない。違うのは、目の前に両腕を吊られた細身の女性が立っていること。黒いハイネックのワンピースは背を割られ、下に覗いた柔肌は透明の粘液に濡れてヌメヌメと光っている。こちらに向けられた細面の顔では、切れ長の瞳が驚愕に見開かれていた。

「な、なにをしたのっ⁉」
顔を正面に戻し、マクシミールがいる辺りに向かって叫ぶと、目に映っている女性も身体を揺らして叫んだ。まさか、と思って首を捻ると、その女性も振り返る。
（……西園寺の視覚を繋げられた⁉）
体感を繋ぐ能力者は、こんなこともできるのか――驚いていると、自分のうしろ姿が揺れながら近づく。
「ワシの目で見ておるのか？　ふふん、それは面白い」
「面白い？　こんなことが一体なんになると……」
讃岐の言葉が途切れた。グッと迫ってきた自分の背が艶めかしく赤らんでいることに気づき、息を呑んでしまったのだ。
「どうだ、お前の身体はもうずいぶんと色っぽくなってるだろう？　口ではなんとでも言えるだろうが、悦んでいることは隠せていないぞ」
「ひぁっ⁉」
閃く舌に舐められた背筋が、ビクン、と反り返る。紅く染まった柔肌の下で緊張するしなやかな背筋が、西園寺の視覚を通して見えた。ウエストがうねり、スカートをふっくらと膨らませた大きな尻が視線を誘うように踊る。
（やだ……私はこんな風に見えていたの⁉）

舌のくねりに合わせて捻れるグラマーな肢体。割れたメイド服の下で、伸びやかな背が美しいS字を描く。それはまるで、湧き上がる肉悦をこらえきれずに悶えているかのよう。捻れる身体に合わせて紅く色づいた尻房がプリン、プリンと左右に振れた。交互に現れる尻窪に、ときおり見える菊蕾に、顔がカァッと火照り、膝が細かく震えてしまう。

「どんなに強がっても、女は女だ。いまからそれをじっくりと教えてやる」

「あ、やめなさ……うくぅっ！」

後頭部をグイッと前に押された。もう一方の手が服の中に滑り込み、脇を回って胸の前へ。もぞもぞと乳房の狭間を探る。

（しまっ……！）

そこにホルスターがあることは、すでに気づかれていたらしい。止める間もなく引き抜かれ、背のうしろへ――男の目を通して、ノングロス処理された黒い拳銃が見える。いまでは時代遅れのGLOCK 40。傭兵となって初めて手にし、いままで肌身離さず携えてきたお守りのような銃だ。ほかの武器とは重みが違う。

「そんな物欲しそうな顔をするな。あとでワシの大砲を好きなだけ挟ませてやるからな」

「く……っ！」

下品な言葉に唇を噛んでいると、視界が下へ向いた。吸盤つきの手がスカートにかかり、ペチコートごとゆっくり捲り上げる。

「ふぅむ、そそる脚だな。よい色に染まっておる」
半ばほど持ち上げて覗き込んだガマガエル男が、いやらしく目尻を下げ、長い舌で唇を舐めながら言った。伸びやかな脚線美、薄いナイロン地に透けているのはわずかに朱を帯びた瑞々しい肌色。ふっくらと膨らんだふくらはぎも、柔らかくしなやかな筋肉が優美な曲線を作る太腿も、肉の悦びに冒されて艶めかしく火照っている。さらにたくし上げると、投げナイフを吊したゴムバンドの上に隠すモノのない柔肌が現れた。滲んだ汗が、薄明かりを反射してキラキラと光る。そして――。
「ほほう、これはまた、見事な尻だな」
最後に現れた桃尻は、ペチコートの愛撫にほんのりと赤らみ、汗の皮膜に薄く覆われて水蜜桃のようにヌメヌメと輝いていた。細かなフリルで飾られた黒いショーツは細く捩れて尻割れに喰い込み、下着の役目を為していない。ほんのりと紅く染まった肉アケビも布紐に断ち割られ、柔らかな媚肉がムニュリとはみ出している。
「美味そうに実っておるわい。どれ、味を確かめてやろう」
吸盤つきの指先が、黒いショーツに伸びてきた。慌てて腰を捻るが、手首と足首を拘束されているから簡単に捕まってしまう。
「や、やめ……やめなさいっ！」
叫ぶ讃岐を無視し、ストッキングのゴム紐がうしろへ引かれた。薄布の守りを失った尻

肌が空気に舐められ、恥じらいにキュッと引き締まる。次いで黒布がゆっくりと下ろされていき、肉の丸みを超えた。薄ピンク色に染まった尻房がプルン、と飛び出してくる。さらに引き下げられ、秘裂に喰い込んでいた股布が外れた。肉割れと黒布の間に、幾筋もの粘液の糸がかかる。薄布の下で蒸れていた柔肌はほかの場所より赤味が強く、柔肉の谷間に浮いた汗の粒まで煮詰められたように濃密だった。

「ほほう？　可愛い穴があるぞ」

西園寺の目が尻谷を辿り、鳶色の肛門へ引き寄せられた。顔を近づけているのか、浴びせられる視線を恥じてピクピク震える菊蕾が讃岐の視界いっぱいに広がる。赤みがかった半粘膜のシワのひとつひとつまでが、クッキリと見えてしまった。慌てて瞼を閉じたのに、恥辱の映像は消えてくれない。

「そう怯えるな。こっちの穴はあとでゆっくり弄ってやる」

「お……怯えてなど……あ、なにを……っ！」

再び視界の中へ入ってきたガマガエル男の手には、黒い拳銃が握られていた。銃口でショーツをさらに押し下げ、秘部を覗き込む。同時に、両手を吊り上げていた鎖が弛んだ。上半身が前に倒れて、尻をうしろへ突き出すような姿勢に。服の中でブラジャーを外されていた乳房は、重力に引かれて揺れ落ち、裏地に抱き留められた。硬く痼っていた乳首はクニッと折れて、

「うぅっ！」
突き刺さるような快感が一瞬だけ閃く。
（こ、これだけの自由度があれば、反撃できる、けれど……）
視覚は西園寺に繋げられたままだ。目は見えているのに目隠しされているような状態。硬い壁や床に音が反響するため、耳だけでは状況が掴めない。そして、それ以上に、弄られて感じやすくなってしまったこの身体――。
（ですが、戦わなければ……お嬢様のために、負けるわけにはいきません）
梁から垂れた鎖に縋りつき、弛んだ身を起こそうとしたとき。
尻肉の左右に、ねちょっとした感覚が貼りついてきた。吸盤つきの手が、無防備な桃尻をワシッと掴んだのだ。声を上げる間もなく強引にうしろへ引かれ――。
「……っ！」
視野いっぱいに、姿勢の変化に合わせてむにっと開く尻房が見えた。中心に映るのは、紅く熟してわずかに口を開き、蜜を滴らせた肉アケビ。男の視線がふと下に向けられると、先ほどまで秘裂に喰い込んでいた股布には、いやらしく照り光る液体がべっちょりと染みついていた。
「なんだ、偉そうなことを言っていたクセに、もう濡れ濡れじゃないか」
西園寺の嘲笑に、決意が揺らいでしまった。粘液が滲むのは大切な場所を守るための防

御反応、仕方がないことなのだ、恥じることではない――自分に懸命に言い聞かせるのに、頬は火照り心が震える。
「んん？　どうした、震えてるな。硬いのが欲しくてウズウズしてるのか？」
「ふ、震えてなんか……」
言い返そうとしたが、男は聞いていなかった。左手で蜜まみれのショーツをさらに下げると、右手に掴んだ拳銃をむっちりした太腿の間に挿し入れる。
「あ……ダメ、引き金に指をかけたら……うっ!?」
暴発の恐怖に上げた声が、股間に触れた生温かな硬さに断ち切られた。繋げられた視覚で、乳肌に温められたスライドの上部が肉畝を割って潜り込んでいるのを見る。
「く、くぅぅ……っ！」
秘裂を襲う微弱電流。棒状の鉄の塊が淫肉の縁を擦り上げる。腰から力が抜け、脚の感覚がぼやけた。床を踏みしめ、まっすぐに立とうとするのに、淫華を歪めた拳銃が前後に動くと快美感が背を駆け上がり、勝手に反り返ってしまう。弓なりになった背筋に合わせ、桃尻が見えない手に吊り上げられているようにさらにうしろを向く。
「これが欲しいのか？　んん？　どうなんだ？」
男の手に力がこもった。さらに深くめり込んだ鉄の塊が、肉ビラだけでなく、その狭間に隠れた膣口やキュッと噤んだ尿道口の繊細な粘膜までをも擦り上げる。捩れ歪む肉薔薇

と銃の間で、牝蜜がにちゅ、にちゅ、と微かな音を立てた。
「やめ、て、ダメ……やめ、なさ、いぃっ！」
媚肉をしごく凶器は、讃岐にとってかけがえのない銃だった。その、己の分身にも等しいモノが、汚らわしい男の手に握られ、淫具になっている――屈辱に心が軋むのに、粘膜ビラは擦られるたびに悦び震え、徐々に敏感さを増していく。
（ああ、ダメ……感じてはダメ、なのに……）
弄られている肉裂から恥丘にかけて、蕩けるような感覚がじわじわと染み広がる。西園寺の目を通し、ゆっくり赤味を増していく会陰部が見えた。浮き出る汗に濡れ、まるでそこに秘裂があるかのよう。
「やめ、て……やめなさいぃっ！」
淫靡な悦びを産みつける凶器から逃れようとして、メイドは手首を吊る鎖にしがみつき、必死に腰をくねらせた。だが、蕩けた腰には意思が伝わらず、くびれたウエストが虚しくくねるだけ。焦ってさらに身悶えれば、今度は胸の肉果がたぷたぷと揺れ、服の裏地に擦りまくられ気持ちよくなってしまう。双房が踊るたび、先端に鋭い快美感が弾けるのは、硬く痼った肉突起が裏地に圧されて乳暈にめり込み、内側を穿っているせい。コリコリした硬さに揉み解された乳腺に、熱い疼きが蓄積する。
「ずいぶんといやらしく尻を振るじゃないか。普段からコレでオナってるのか？」

第四章　爛れた館

「彼女はアレが好きなんだろう。ＳＭっていうんだよ。知らないのかい？」

青年の言葉もよく分からない。厳格な王室から離れて三年にもなるが、その間ずっと使命感に燃えたメイドが傍にいたから、その手の情報はほとんどシャットアウトされていた。もちろん、ナニをどうしたら妊娠するかとか、生殖目的以外の性行為があると言うことは知っていたが、それはもう想像するだけでも顔が紅くなるほど恥ずかしいことで、讃岐にもいけないと言われていたし、努めて考えないようにしていたし……。

「うわぁっ！」

溢れ出す羞恥心に耐えきれず、クリスは両手で顔を覆った。ショーツの中がムズムズとして、じんわり熱を帯びてくる。いくら厳しく躾られていてもそこはそれ、多感な年頃の乙女だ。日に日に変化する自分の身体に意識は向き、ときおり抑えがたい衝動が込み上げてくることはある。身体が疼いて火照って夜も眠れないとき、どうするか――誰にも言ってはいけませんよ、と怖い顔をしたメイドは、指で慰める方法を教えてくれた。あまり頻繁にすると病気になるから、月に一、二回、どうしても我慢できなくなったときにちょっとだけ、という条件で。ソレをするのはとても恥ずかしいことで、お祖父様やお父様に知られたら殺されてしまいますよ、と脅されていたからほとんどしたことはないが、それでもあの感覚は知っている。それが男と女がナニするときのアレに似ていて、だからこそ恥ずかしいしイヤラシイしイケナイことだし、というのも最近ようやく分かってきた。

（やだダメ、こんなトコでこんな気分になっちゃダメ……）
両手を被せてギュッと押さえたいほど疼く股間を、コートの下で膝を内に向け、太腿を摺り合わせて我慢する。だが、まるで誰かにまさぐられているようにウズウズは消えず、いやらしい快感が染み広がって煮られたように熱くなってきた。
火照った顔を両手で隠し、モジモジと膝を摺り合わせている従妹をねっとりとした目で盗み見ていたマクシミールは、ふと視線を上げてなにかを見つけた。
「よく読んでなかったな？　クリスティーナは昔から、そそっかしかったものな」
腰を屈め、紅く染まった可愛らしい耳朶に唇を近づけて「ごらん」と指差す。
「……！」
指の間から目をやったお嬢様は、碧眼をこぼさんばかりに丸くして絶句。痴態を晒しているのはコンパニオンのメイドだけではなかった。ヌメヌメと光る黒いラバースーツを着た女性客は、顔には角の尖った眼鏡をかけているのに、肝心の乳房と秘部を覆うモノはなく、恥ずかしい場所の柔肉を晒してしなを作りながら歩いている。先ほど見かけたアマゾネスはテーブルの上に腰かけて脚を左右に広げ、自らの指で肉割れを開いて男性客たちに覗かせていた。全裸のうえ、乳首にリングピアスをされ、首輪から垂れた鎖で引き回されている少女もいる。そしてなるほど言われてみれば、彼女たちはそれぞれの髪に、なんらかの髪飾りをつけていた。

「あ……帽子⁉」
慌てて自分の頭に手をやるクリス。探偵の正装として、鹿打ち帽は欠かせない。それにうしろの鍔の下には、パニに頼んで着けてもらった紅いリボンがある。自分もそんな、はしたない女の子だと思われたら……怯える少女の肩を、青年は気軽に叩いた。
「大丈夫、帽子は髪飾りじゃないよ」
「ああ、よかった……あン⁉」
ホッとしたのも束の間、ショーツの中のウズウズが強くなる。本当に、いくつもの指でまさぐられているようだ。最近厚みの増してきた柔肉の畝が、優しい指遣いで揉み解されている。肉ビラが摘み伸ばされ、襞を広げるようにしごかれて、あの「いけない」悦びが満ちてくる。
（そんな、どうして⁉）
周囲の痴態に触発されて、昂奮してしまったせいか。太腿を摺り合わせているために肉畝が押し潰され、プニプニした側面が擦れ合っているのか。
「どうしたんだい、クリスティーナ。顔が真っ赤じゃないか」
「う、ううん、なんでもない……」
横顔を覗き込まれた少女は、慌てて首を振った。羞恥に震える膝に力を込め、内腿が触れ合わないよう足先を外に広げる。

（⁉　違うコレ、脚のせいじゃない！）
肉土手にかかる圧力は消えたのに、弄られている感覚はなくならなかった。そればかりか、誰の手にも触れられておらず、何モノにも圧されていない小さな乳房が、強く握り潰される。成熟途上の胸丘の奥にある、蕾のように硬い痼りを無理矢理揉み解そうというのか、ギュウ、ギュウ、と痛いほどの圧力がかけられていた。揉まれていない乳肌には、ブラジャーに守られているというのに羽ぼうきでくすぐられているような感覚がある。
片方の掌で隠せてしまうほど小振りな美乳が、強烈な愛撫と軽妙な玩弄に蕩けていく。芯の痼りは揉み解されて柔らかくなり、肌の裏側では軽いタッチに呼び覚まされた快楽神経が細かな枝を張り巡らし、さらなる刺激を求めて疼き始める。
「う、くふぅう……」
奥歯を噛み締めるのにこらえきれず、声が漏れてしまった。人前でなかったら、掌を被せて滅茶苦茶に揉み潰していたかもしれない。
（なによコレ、一体なにがどうなって……あ）
リィィン――リィィン――。
澄んだ鈴の音が耳の奥に響く。精霊の囁きだ。ざわめいたパーティ会場の情景がぼやけ、そこに薄暗い部屋の映像が重なる。一面の壁にはいくつものモニターがはめ込まれ、青白い光を放っていた。中にいるのはガマガエルのような西園寺知事と、一様にいやらしく笑

み崩れた制服姿の男たち、そして――。

（讃岐⁉）

頬を桜色に上気させたメイドが見えた。肘掛けつきの椅子に脚を開いた格好で縛りつけられ、群がる男たちに乳房や肉割れを弄られて。

目を背けたくなる光景を、腹に力を込めて見つめるクリス。やはりここにいるのだ。そしてこの、身体をまさぐる感覚は……。

（讃岐がされているのと、同じ部分だわ。でも、どうして……）

疑問に答えるように、精霊の視界がスウッと横へ動く。部屋の隅に腰かけたジャンキーが見えた。この場に相応しくない虚ろな相貌に、能力者だと直感する。この男が、讃岐の体感をクリスに流し込んでいるのだろう。

映像が揺らぎ、消えた。耳にざわめきが戻ってくる。

讃岐の姿は見えなくなったのに、身体をまさぐる手指の感覚は消えなかった。むしろ激しく、強くなる。胸を這い回る手はいくつにも増え、柔肉半球の先がムニムニ揉まれているのと同時に、乳丘の麓が激しく擦り上げられた。太腿の間の秘裂には何本もの指が侵入し、肉ビラを掻き分け膣口の縁まで近づいてくる。あぶれた指は会陰部をくすぐり、尻肉を揉み始めた。柔肌にぺたっと貼りつく生温かいモノは、舌か、唇か――。

「ひゃンっ⁉」

お尻の穴にズブリ、と潜り込んできた硬い感触に、思わず悲鳴を上げてしまった。声に驚いた客たちが、クリスに怪訝な視線を向ける。

（や、やだ……見ないで、こっち見ないでよぉ……！）

尻に回しかけていた手を慌てて止め、握り拳を固めて耐えた。実際に弄られているのは讃岐で、ほかの者にはいやらしい手指は見えない。周囲の痴態を見てはしたなく昂奮している少女がいる、と思われるのが関の山だ。

（違う、私はそんな、変態じゃない！）

叫びたくなる衝動を、グッとこらえた。きっと西園寺たちはまだ私のことを見つけられないでいるから、こんな遠回しな方法で炙り出そうとしているのだ――そう推理し、肝に力を込めて、肛門の中でクネクネ蠢いている指の感覚を無視する。

「本当に大丈夫なのかい？」

マクシミールの声に、ハッと我に返った。

「え、ええ……あ、ごめんなさい」

気がつくと、品のよい老夫婦（に仮装した男女）が目の前にいる。金髪の青年実業家と挨拶していたらしい。迷惑なことに、クリスの腰に手を回したマクシミールが、私の従妹です、と紹介してくれる。

「とすると、ウィロー王家のお姫様ですか？　これはこれは、お目にかかれて光栄です」

「いえ、こちらこそ……」
微笑みながら会釈するものの、お嬢様の意識は自分の身体に向けられていた。胸の上を芋虫のように這い回る指の感触が、次第に乳首の周囲へ集まってくる。そして小さな肉豆を見つけると、上から押さえつけ、クリクリと回し始めた。
（やン！　ヒトと話してるのにぃ……！）
胸先に微弱な快感電流が渦巻く。乳暈の裏側に熱いモノが溜まり、肉突起がムクムクと膨れ始めた。いけないコトをしたときと同じ反応。誰かに気づかれていないかと、周囲の視線が急に気になる。
「それにしても、可愛らしいお姫様だ」
老紳士のフリをした男が、目尻を下げてジロジロと見つめてくる。涎を垂らさんばかりのいやらしい表情だ。まるで服を透かし、あちこちをまさぐられて火照り始めた肢体を観察しているような――と考えたところで気がついた。ここは新東京都だ。客の中には透視能力を持つ者だっているはず。
パーティ会場の中、見えない手に秘部を弄られ、乳房を玩ばれた自分が、裸で立っている構図が思い浮かぶ。裸の王様だ。客たちは気づいていないクリスに合わせて普通に振る舞っているが、見えないところでは指差してクスクス笑っているのではないか……。
（ああダメ、考えちゃダメだってば！）

慌てて首を振ったのに、一度浮かんだ羞恥の想像は消えてくれなかった。ぷっくりと膨らんだ乳首を腕で庇いたくなる。股間に手を被せ、太腿に挟み込んで、その場に蹲(うずくま)ってしまいたかった。

膨らむ妄想に呼応するように、柔肌に感じる手指の蠢きがより強くなる。胸先の肉突起が摘み潰され、キュウ、キュウっと引っ張られた。そのたびに針のように鋭い快感が乳奥まで突き刺さり、双球が奥からじんわり熱くなってくる。内側から炙られた柔肉はいやらしい気持ちを孕んで膨れ上がり、少し大きめだったブラジャーがきつくなってきた。乳肌は弾けそうなくらいに張り詰めるが、服の上から執拗に撫で回されているのか、小振りな胸丘を包み込んでさわさわと這い回る羽根のような感触が痛みを散らし、代わりに微妙な感覚を植えつけてくる。

胸に充満する恥ずかしい感覚をこらえていると、

「アナタによく似たヒトがニュースで紹介されていましたよ。なんといったかな……」

偽紳士がこめかみに指を当てて考え込んだ。慌てたクリスは、自分から答えを言う。

「美少女私立探偵、クリス・クロムウェルさんでしょう？　私もよく似ているなあって思ったので、こんな格好をしてみましたの」

「そう、それそれ。本当にそっくりですなあ」

本物ではないかと言われそうでヒヤリとしたが、マクシミールが横から口を挟み、男の

注意を引いてくれた。
「ほう、その探偵はそんなに有名人なのですか？」
「新東京都の住人で知らない人はいないでしょう。なにしろやることが派手でして……」
いろいろ尾ヒレのついた自分の武勇談を、愛想笑いを浮かべて聞き流しつつ、クリスは自分の身体へ意識を戻す。
ショーツの中では肉土手が割られ、潤み具合を確かめるように、感じやすい粘膜器官の表面が何度も何度も擦られていた。そのたびに心地よい痺れが発し、恥裂を支配していく。硬い指先を感じた繊細な秘肉は蜜をジュクジュク滲ませ、はしたないほど火照ってきた。クリトリスが膨れ、包皮を押し退けようとしているのか、肉割れの端にこらえがたい疼きがピキン、ピキン、と閃く。
内側から揉み解された肛門が、じんわりと熱を帯び、弛んできた。硬い指が蠢くたび、蕩けるような感覚が左右の尻房に広がっていく。そこにあると意識することさえ恥ずかしい肉孔で、気持ちよくなっている自分が信じられない。
（や、やだ……私、変になってる……）
頭の中が桃色に染まり始めた。老紳士がなにか言っているが、意味が取れない。胸に手を被せ、中に渦巻く疼きを揉み和らげたかった。股間に手を添え、硬く痼った肉豆を揉み潰したい――イケナイことだが、そうしないとおかしくなってしまいそうだった。

第七章　堕落

（や、やだ……私、ヘン……おかしくなっちゃった……）

オチンチンを見た途端、イケナイ穴がじゅん！　と熱くなった。ディルドに教え込まれた淫悦が蘇る。犬の肉棒を疑似体験し、射精まで感じ取ったお尻の穴が、こらえきれないほどムズムズし始めた。ニセモノやケダモノであれほど気持ちよくなってしまったのだから、本物だったら一体どうなってしまうのか――胸がドキドキ高鳴る。碧い瞳に好奇と期待の色が浮かび、ゆらゆらと揺れる。

「物欲しそうな目をしやがって。そんなにコレが好きか？」

「ち、ちが……そんなこと、ない……」

口では否定したものの、淫唇ははしたなく喘ぎ、粘液の塊がこぽっと噴き出してきた。漂いのぼる甘酸っぱい芳香は咽ぶほどに濃く、一息吸い込んだだけでクラクラしてしまう。

「ずいぶん待たされたからな。全部の穴を使って俺たちを悦ばせろよ」

讃岐の尻に手をかけた男が、エプロンドレスの肩越しにクリスの顔を見下ろして笑う。

「え？　ど、どういう……」

訊き返す少女には答えず、覆い被さったメイドの尻房を左右に押し分けて、触れ合いそうなほど接近したふたりの秘貝を検分する男。淫猥に熟しきった讃岐のソレはもちろん、青みが残るクリスの肉アケビも、いまは大量の蜜に濡れ、充血して厚みの増した淫唇を喘がせて、ねっとりとした涎を垂らしていた。

「少し犯りにくいが、このままでもできるか」
「なに？　なにを……あぁあッ！」
間に讃岐を挟んだまま、少女の尻に腰を近づけ、男は挿入を開始する。
（な、なにコレ……熱い！　さっきのと、全然違うぅう!?）
本物のペニスは白く灼けた鉄の棒のようだった。滾る亀頭に擦り上げられた粘膜穴の縁がジンジンと痺れる。雄々しく張り出したエラが膣襞を掻き分けると、股間に甘美な電流が溢れた。
「く、ひぃぃ……あぁ痛い、痛いぃぃッ！」
激感に背が捻れた途端、ふたつの胸先と肉畝の縁に火花が弾ける。結びつけられた糸がピィンと張って、みっつの性感極点を責め立てるのだ。
「ひぅぅぅ……お、お嬢様ぁぁっ！　ジッと、してくだ、さ……いぃぃッ！」
「そ、そんな、こと、言われてもぉ……ああダメ、捻っちゃイヤァッ！」
奥深くまでねじ込まれた男根が、膣の内部でグルッと回る。讃岐を挟んで正常位で少女を犯していた男が、秘裂を貫いたまま身体を横たえようとしていた。捻れた肉棹に撹拌された粘膜穴がカァッと燃え上がる。膣奥を硬い鼻先にグリグリされると、熱いモノが膨れ上がった。
（いや、いやいやいや……こんなのって、こんなのってぇぇ……ッ！）

背を駆け抜ける津波。たまらず身悶えると、乳房の先端と股間の極みがスパークし、杭のように太い肉悦が脳天を突き抜けていく。瞼の裏に白い閃光が走った。軽く舞い上がり、反り返った細い喉を震わせてあうあうと喘ぐクリス。

「お、お嬢様、しっかり……あぅぅ!?」

その上で、讃岐もまた、背を反らして春声(あえぎ)を上げた。犬の精液をこぽこぽこぼしていた肛門に、ゆっくりと潜り込んでいく剛棒。白濁液にまみれた直腸粘膜が肉塊にしごかれ、ビリビリと痺れた。その感覚はクリスのお尻にも転写される。

「うぇぁあッ!? お尻、お尻がぁぁ……!」

「なんだ、お姫様もケツに挿入(い)れて欲しかったのか」

泣き喚く少女の肩に手がかけられ、グイッと引き起こされた。膣を犯した男がテーブルの上に仰向けになり、その腰に座る形。背中の下で縒れていたコートがブラウスを巻き込んでずり落ち、白くて細い肩が露わになった。真上を向いた肉棒が淫穴を貫き、肉クサビの切っ先が膣奥を突く。

「はうぅんッ!」

身体の奥底で熱いモノが爆発。男の腰にお尻を下ろしたクリスは、はだけられた胸を反らして小振りな美乳を振り立てた。股間に弾けた感覚が過ぎ去る前に、テグスにくびられた乳首とクリトリスがキュンキュンと締めつけられ、針のような快悦が突き刺さる。向き

合って座った讃岐の身体に慌ててしがみついたものの、
（ああ飛ぶ、また飛んじゃうぅぅ……！）
背を捩って悶えると、咥え込んだ男根に掻き回されたイケナイ穴がカァッと燃え上がり、テグスを結わえつけられた勃起小突起に電流が生じた。頭の天辺（てっぺん）を突き抜けていく矢のような飛翔感。手足の先で細指がキュウッと曲がり、メイド服の背に爪が喰い込む。意識は白く痺れ、なにがなんだか分からなくなってきた。
「おっと、まだイくんじゃないぞ。オチンチンはたくさんあるんだからな」
大きな手に背を押され、身体が前に倒れる。可愛い桃尻が持ち上がり、プリッと引き締まった尻房の間に捲れ返った肛蕾が露わになった。万年筆に犯され、犬のペニスを疑似体験していた排泄孔は、紅い粘膜をはみ出させ、喘ぐようにヒクついている。そこへ――。
「えぁ!?　あ、あぁあっ！　お尻は、お尻はイヤぁぁッ！」
ズズズズズ、と太いモノが潜り込んできた。今度は本物だ。弾力のある熱棒に括約筋が押し広げられる。彫りの深いカリ首が直腸粘膜を掻き分けつつ、ゆっくりと、腹の中へ埋もれてくる。
（あ、熱い……お尻が、溶けちゃうぅぅぅ……）
繊細な肉穴を炙る牡の熱塊。シワを失うほど引き伸ばされた肛口から桃色の尻肉に向けて、暖かな感覚がじわじわと広がっていく。たくましい太さに擦り上げられた直腸粘膜が

たちまちドロドロに蕩けてしまう。二本の剛棒に挟まれ、クッキリ張り出したエラと肉棹の捻れに揉み潰された粘膜隔壁には強烈な快感が膨れ上がった。
途中までねじ込まれると、再び肩を掴まれ、グイッと引き起こされる。自らの重みで、尻穴に刺さった肉棒を深々と受け入れてしまうクリス。擦り上げられた排泄孔が熱くなる。二本の肉棒に挟まれた粘膜隔壁が、カァッと燃え上がる。
「いぁ……いぁなの……おひりは、らめらのぉぉ……」
あまりに気持ちよすぎて、呂律が回らない。天井を向いた碧眼は焦点を失い、熱っぽく潤んでゆらゆらと揺れる。「らめぇ、らめぇ」と繰り返す譫言(うわごと)には甘い響きが混じっていた。弛んだ目元からは法悦の涙が垂れ落ちる。指遊(オナニー)びでは一瞬しか感じられない極みの感覚が、ずっと居座り続けているのだ。
「くぅぅ……なんていやらしいお姫様だ。薄づきの肉襞がチンポに絡みついてくる……」
「ケツのほうもすげぇぞ。喰いちぎられそうだ」
少女を犯した男たちが、愉悦に頬を赤らめて呻く。悦びのあまり、括約筋が痙攣するほど緊張していた。肉穴周囲の平滑筋はグニュグニュと伸縮し、膣襞を波打たせ、直腸を蠢かせて男根を揉み絞る。牝の悦びに目覚めた幼い身体が、牡のエキスを渇望していた。
「よしよし、イかせてやるからな……」
「ふぇ？　にゃ、にゃに……にゃにを……あぁあっ!?」

お尻の穴とイケナイ穴が、ズンズンズン、と激しく突き上げられた。叩かれた膣奥に稲光が走り、硬い鼻先にこじ開けられた結腸口に快美感が閃く。たまらず反り返ると、讃岐と繋がれたテグスがちぎれそうなほどピィン！　と張って、引っ張られた乳首とクリトリスに鋭感が弾けた。

「ああ、お嬢様、わ、私もぉぉッ！」

向き合ったメイドはビクビク震え、クリスの背を抱き締めた。むっちりした太腿をさらに広げて密着し、だらしなく口を開けて汁をこぼす秘貝を擦りつけようとする。だが、触れ合いかけたふたりの鼻先に、棒状の物体がニュッと突き出された。

「あとがつかえてるんだ、口も使えよ」

おぞましく捻れた男根だ。亀頭は紅く輝き、肉棹には静脈の青い網目が浮き上がっている。鼻腔に流れ込んでくる生臭い牡香。込み上げてくる本能的な恐怖にヒッと息を呑んだクリスは、思わず顔を背ける。

「ワガママなお姫様だな。それともなにか？　俺たちのように下賤なチンポは咥えられないってか？」

金髪を掴まれ、無理矢理戻されてしまった。頬に鎌首が擦りつけられ、唇にカウパー液が塗りつけられる。

「ちぁ、ちぁうぅぅ……いぁ、いぁ……ひぁあっ⁉」

涙をこぼしつつ頑なに拒んでいると、いきなりクリトリスに激感が突き刺さった。讃岐の乳首に繋がれたテグスが、軽く弾かれたのだ。
「ひぃぃ！　や、やめ、らめ、ヘンになるぅぅぅ……ッ!!」
女体に張られた弦が爪弾かれ、ビィンビィンと震える。炸裂する鋭感に仰け反り、金色の髪を振り乱して悶えると、向かい側でも悲鳴が上がった。讃岐が腰をくねらせると乳房が揺れて、淫核がますます強く引っ張られる。
「くぅぅ、いい締めつけだ。そら、もっと鳴け！」
赤らんだ顔を仰向け、狂ったように喘ぐ少女を、尻穴を犯した男が笑った。脇から回した手でテグスを弾きつつ、腰の動きを速める。膣穴にねじ込んだ男も、背が浮くほどに腰を振り立て、小柄な少女を突き上げた。
（ああダメ、もうダメ……死ぬ、死んじゃうぅぅぅ！）
肉クサビに突き揺すられた子宮の中で、溶岩が煮え滾る。お尻の穴の奥底に刻み込まれる快美感。硬い先端が結腸口に潜り込み、繊細な粘膜をグリグリと抉っているのだ。双穴を隔てる粘膜隔壁は、激しく上下する二本の肉棒に揉みくちゃにされ、ゼリーのように柔らかくなった。ぐぽぐぽ音を立てる肛門と膣口では紅い粘膜が捲れ返り、煮詰められたように濃密な愛液を噴きこぼしていやらしく歪む。
小さな身体が上下に揺れると、肉突起を繋いだ糸がちぎれそうなほどに張り詰めた。引

っ張られた小突起に電撃が閃き、クリスの意識が飛ぶ。
「はひぃぃ、はひぃぃ……んぷっ!?」
涎を垂らして春声をこぼす小さなお口に、熱い肉棒がねじ込まれた。抗う舌を押し退けて、頬粘膜を擦り上げながら喉奥までズプリ。
（いやぁ！　オチンチンが、オチンチンが口の中にぃ……ああ、でも、どうして……）
強張りを感じた舌が、気持ちよかった。クサビに擦られた頬粘膜や切っ先に小突かれた咽喉が蕩けていく。責め立てられた肉穴や肉突起の悦びに影響されているのか――舌に感じる重みがどうしようもなく愛おしい。味蕾に染み込む淫肉の味が、美味い。先走り汁の青臭さが気道を遡り、鼻腔粘膜を刺激した。頭の芯が痺れ、涙を溜めた目元がふわっと弛む。ジュワッと溢れる唾液。喉を鳴らして飲み込むと、唾液に溶け出した牡エキスが消化器官を冒し、お腹の中まで気持ちよくなる。
「んぁ、んちゅ、んちゅ……」
牡肉の味や匂いに朦朧とした少女は、本能の命じるままたくましい肉塊をしゃぶり立てた。広げた舌で亀頭を舐めさすり、縁を立ててカリ首を穿る。少し前、バルコニーでフェラチオをさせられた讃岐と同じテクニック。舌先を細かく震わせて裏筋を刺激し、鈴口をこじ開けて唾液を塗り込もうとする。
「お？　なんだ、口でするのは初めてじゃないのか」

意外に慣れた口唇奉仕に、男は嬉しそうに頬を綻ばせた。遠慮は要らねぇな、と独り言のように呟くと、クリスの小さな頭を掴み、ゆっくりと腰を回すように動かす。

「ふぇぁっ⁉　ンふぇぁ、んはぁぁぁ……」

ぐぽ、ぐぽと喉にはまる亀頭。一瞬の息苦しさが、なぜか気持ちいい。蠢く肉棹にしごかれた舌にも、捲れ返る唇にも、暖かな心地よさが溢れる。まるで口が膣やお尻の穴になってしまったかのよう。縦に伸びた朱唇からこぼれ落ちる涎も、淫水のように粘っていた。白く泡立ち、細い喉から華奢な鎖骨を伝って、桜色に火照った乳房を濡らす。

（ああ、すごい……オチンチンって、気持ちいい……）

男根に掻き回されたお口やお尻、イケナイ穴からエッチな悦びが湧き上がる。細糸を結わえられ、キュンキュンと責め立てられている三つの肉突起には次々と火花が弾けていた。太腿やお腹も、向かい合わせて座った讃岐の柔肌と擦れ、滲んだ汗をぬちょぬちょ塗りつけ合って溶けていく。

「いい顔になってきたな、お姫様。ああ畜生、我慢できねぇ！」

絡み合う男女から立ちのぼる濃密な淫香に酔ったのか、順番待ちをしていた男が痺れを切らした。少女の細い手首を掴んで捻り上げると、自らの股間に引き寄せ、爆発寸前まで怒張した逸物を握らせた。

（あはぁ……コレ、すごく硬いぃ……）

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

あなたのキモチイイをお手伝い!
キルタイムのアダルトコミック誌!
業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!
二次元ドリームマガジン
偶数月17日発売
魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!
コミックアンリアル
奇数月12日発売
フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!
コミックプリズム
2・6・10月下旬発売
KTCといえば闘うヒロインアンソロ!
メガミクライシス
奇数月中旬発売
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて!
キルタイム
検索
Click
電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!